

構成授業における合理的製作工程の試み

—女物ひとえ長着について—

小川 秀子

A Study of the Rational Making Process in a Sewing Class—
Consideration about Ladies' *Hitoenagagi*

Hideko Ogawa

1. はじめに

ここ数年、夏のカジュアルウェアのひとつに、ゆかたブームがみられる。夏のお洒落着として気軽に身につけることのできるゆかたは、和服本来の色や柄といったクラシカルなイメージのものよりも、ドレス感覚で着ることのできる絵柄や色彩等が人気をかくしている。本学短大生も、和服へのあこがれは成人式や卒業式の晴れ着姿であり、とくにいちばん身近な和服としてゆかたをあげている。そのなかで着付けやゆかた製作を希望する意欲的な学生も年々多くみられる。

そこで今回は、市場に溢れる多種・多様の既製品ゆかたの中で、いくつかの問題点を探り、和服仕立てにおける手縫いの美しさを考慮したうえで、今後の衣生活において、実践できる必要な要素をとり入れた縫製方法を試みた。

中学・高校の学校教育をとおして、手縫いの基本となる運針の経験をもたない学生が多くみられ、今後もこのような傾向は続くと思われる。このような学生に対して、決められたカリキュラム内で、すべて手縫いといった、これまでの実習指導は、学生が望む製作したいという意欲さえ失いかねないおそれがある。

このような現状を踏まえたうえで、合理的な技術手段や縫製方法を試み、今後の被服教育指導に役立つことを目的として行った。

2. 調査資料および方法

2.1 調査対象・調査時期

本学短期大学 生活文化学科 1年206名を対象に、1997年質問表により授業終了時に行った。有効回答数、182枚（回答率88.3%） 質問表は別紙の通り

2.2 調査内容

調査内容は和服に関する意識項目を設定した。今回の項目中の、和服の着用経験・和服着用目的・和服着用回数の設問を対象として行った。

調査表は別紙に示す。

3. 調査結果および考察

3. 1 和服に関する基本的内容

- (1) 和服着用経験 (表1)
 (2) 和服着用目的 (図1)
 (3) 和服着用回数 (図2)

表1 和服の着用経験

N=182	
あ る	な い
59.9	40.1

(%)

図1 和服着用の機会

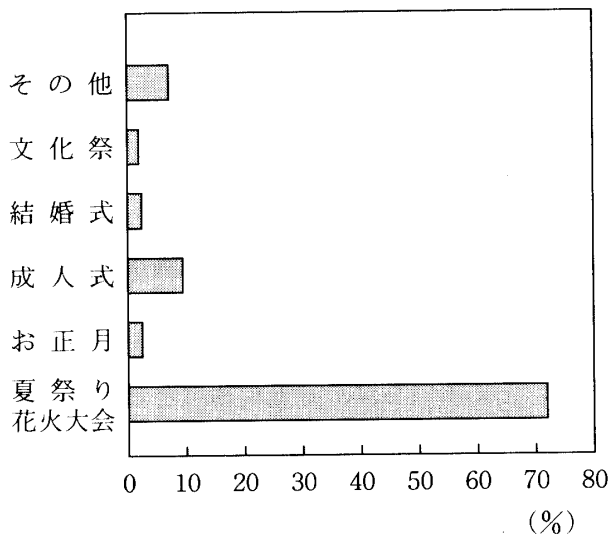
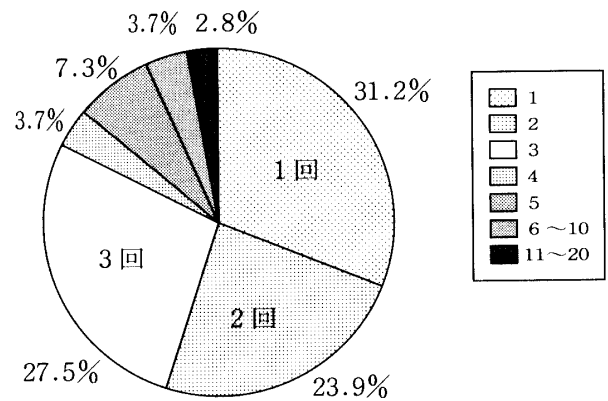


図2 和服着用回数



高校入学以降、和服を着たことがあるか否かについて、着た経験がある学生が59.9%、着た経験がない学生は40.1%であった。着用経験がある学生に対して、着用目的はどのような機会であったかを質問したところ、夏祭り、花火大会の項目である、夏期のシーズン着用の浴衣と71.6%が答えている。一年間に何回位着用したかをみると、1回着用が31.2%と一番多く見られ、次いで3回が27.5%、2回が23.9%と答えている。浴衣着用経験のある80%以上の学生が、1~3回位和服を着ていることがわかる。中には10回以上と答えた学生も2.8%とわずかではあるがみられた。

4. 目 的

今回の調査で分かるように、和服の中で一番着用率の高い浴衣であるが、この中で8割以上の学生が年間着用回数は1から3回と答えている。このような現状で着られる浴衣に対して、これまでの「和服を仕立てる」という、従来の手引き書に従って、すべて手縫いといった技法・技術が本当に必要なものか。着物社会であった頃、和服は洗い張りや縫い直しを繰り返し行い、最後までそのものを生かして着ることが、和服文化の特徴であった。そのために縫い直しが容易にできる、すべて手縫いという技法は、和服の仕立てには最良の方法であった。

しかし、学生のこれまで経験した縫い実習や技術力の低下にともない、限られた時間内ですべて手縫いで、一枚の浴衣を製作することは、非常に困難を有する。そこで学生がこれまで経験したミシン作業を併用することで、縫い時間の短縮化が可能となり、工程手順を組み立てを考慮することで能率よい作業が行われると考えた。

5. 方法および考察

表2-1に示したものは、これまで行われている手工程の浴衣製作手順と今回行なった手縫いとミシンを併用した手順の比較したものである。

表2-1 構成方法

本来の手縫い方法と今回試みたミシン・手縫い併用の方法を比較した表を示した。

A 法 本来の手縫い方法		B 法 ミシン・手縫い併用方法
① 袖	袖下袋縫い・中縫い 袖下・袖口下縫い 丸みのしまつ 袖口三つ折りぐけ	① いしき当て・肩当てづくり おくみ下三つ折リオさえじつけ
② 身頃	背縫い 二度縫い いしき当て・肩当てづくり いしき当て・肩当てつけ	② 身頃 背縫い 二度縫い いしき当て・肩当てつけおさえじつけ
③ 脇	脇縫い 縫い込みしまつ	③ おくみ おくみつけ 縫い代おさえじつけ
④ おくみ	おくみつけ、しまつ えり下の三つ折りぐけ	④ 地えりの上に共えりを乗せ一枚のえりにする
⑤ えり	えりつけ、三つえり芯入れ えりづくり えり先・えりくけ 掛けえりつけ・くけ	⑤ えり えりつけ、三つえり芯入れ
⑥ 裾ぐけ		⑥ 袖つけ 袖口・袖下縫い・丸みづくり
⑦ 袖	袖つけ 縫い代しまつ	⑦ 脇 縫い 縫い代おさえじつけ
⑧ 仕上げ		⑧ 裾ぐけ 三つ折リオさえじつけ ⑨ 手工程をすべておこなう ⑩ 仕上げ

1) この表で示したA法の場合、一番最初に袖づくりから入っている。この中で縫いの種類は部位別縫い方法 表3に示すように、並み縫い・ぐし縫い・三つ折りぐけ・耳ぐけと4種類の縫い方が含まれている。ここで行われる縫い方法の中で、初めて体験するくけ縫いに、学生は戸惑い、縫い針が遅々として進まず、こんな筈ではなかったと少なからず挫折感を味わうことになる。

そこで今回実施したB法は、まず布の扱いが容易で、これまで経験したミシン作業でできる、いしき当て・肩当てづくりを最初に行うことで、徐々に縫うことに慣れさせることから入った。

2) 身頃は後ろ身頃を中心である背縫いを2度縫いするが、例えば身長160cmの学生の場合、着物の身丈は身長とほぼ同寸法であるために、 $身丈160\text{cm} \times 2 = 320\text{cm}$ の並縫いを要する箇所であ

表3 部位別縫い方法

部位	工程	ミシン工程		
		縫い	くけ縫い	縫い名称
そで	口		○	三つ折りぐけ
	下	○		
	つけ	○		
	ふり		○	耳ぐけ
背	縫い	○		
脇	縫い	○		
	しまつ		○	耳ぐけ
おくみ	縫い	○		
	しまつ		○	耳ぐけ
えり	縫い	○		
	しまつ		○	本ぐけ
えり下	しまつ		○	三つ折りぐけ
裾	しまつ			三つ折りぐけ
肩当て				一目落し
いしき当て				一目落し・耳ぐけ

る。運針経験がほとんどない学生にとっては、この3m20cmの寸法を一針一針縫うことは、単純な作業であるが時間を費やす工程である。そこでミシン縫いで処理することで能率よく進めることが可能となった。

3) A法とB法の大きな違いとして、③～⑥で示す通りであるが、従来の方法であるA法は脇縫いを先に行い、その後におくみつけ、えりつけの手順がなされている。ミシン併用のB法は、背を縫い合わせた後、おくみつけを行い、えりつけはその後に行なう工程手順である。この場合、えりつけ前の準備として、地えりの上に共えりを乗せ二枚のえりを、一枚のえりとした形づくりをした後、えりつけを行う縫製方法である。

A法⑤のえりつけの場合は、脇縫いが終わった後の作業のため、前身頃～後ろ身頃と続く一枚の身頃の布を、平らに広げることが不可能になった状態でえりをつけていく方法である。まず地えりを身頃につけ、えりづくりをした後、共えりをくけつける、といった3工程を繰り返す。この工程は手縫いに慣れていない学生にとって至難の技であり、非常に忍耐を要し、最も時間を費やす工程部位である。従って、これまで行われた困難極まりない3工程からなされるえりつけ方法を簡素化し、学生らによって着られる、浴衣のニーズに合った縫製をB法⑤で試みた。

4) 着物を仕立てる場合、いちばん難しく技術を要する箇所として、⑤で示すえりつけがあげられる。平面構成であるきものは、いくつかの長方形の布で組み立てられており、直線縫いがほとんどを占められている。このような構成の中で、えりつけ・えりづくりの部位は、曲線と直線の組み合わせで構成されており、きものを着装した場合、バックネックポイント～サイドネックポイントにかけてのカーブラインの部位縫製は、きもののできばえに大きく影響する。

和装美のひとつにあげられる、えり足の美しさは着衣した後ろ姿で表現され、人目をいちばん集めやすい所でもある。そこで、きもの製作の中で難所といえるえりつけ部位を、脇縫い以前の

作業で行なうことは、前身頃から後ろ身頃と繋がった布を、平台の上に平らに広げて作業ができるといふこと、布の取り扱い易さ、えりつけ後のアイロン処理のしやすさからしてA法で行なうえりつけの難易点を解消することができる。

5) B法⑥で袖つけを行なっているが、この場合も身頃を平らに置きそ上に袖を乗せミシンで縫う方法である。この後袖口から袖下にかけて一度に作業を行うことができ、袖の丸みづくり後、⑦の脇縫いをここで行なう。A法では裾ぐけの後に、⑦の袖つけ・しまつを行っている。

6) A法とB法を比較した場合、いちばん大きい違いは、A法では各部位を並み縫いとくけ縫いを繰り返し行うことで、部位ごとに縫い・くけ縫いを終わらせていき、最後は仕上げアイロンの作業で完成ということになる。B法では表2-2で示すように、ミシン縫いの作業を可能な限り先に行い、その後アイロン作業に入り、各部位の必要きせ寸法が、逃げないようにしつけで押えておき、最後にまとめて表4に示した、くけ縫い・その他のしまつを行う。

この手工程をまとめて行なうことは、③・④・⑥・⑦の部位は耳ぐけ・②・⑥・⑧は三つ折りぐけ、⑤本ぐけ、⑤・⑥・⑧その他の縫いを、それぞれ同時に行なうことで、同じ動作の繰り返しは手が慣れ、コツをつかむことができ、より効率的に作業を進めることができた。

表2-2 構成工程

	準備工程	ミシン工程	手工程
①	いしき当てづくり 肩当てづくり		
②			おくみのえり下を三つ折りし、しつけでおさえる
③		背縫い 二度縫い	いしき当て・肩当てを身頃に中とじた後、まわりはしつけでおさえる
④		前身頃におくみつける	縫い込みはしつけでおさえる
⑤	地えりの上に共えりを のせ一枚のえりにする	身頃にえりをつける	三つえり芯入れ えりづくり でき上がりえり幅に折り、しつけでおさえる えり先しまつ
⑥		身頃に袖をつける 袖口に止まりから袖下 袖ふりまで縫う	縫い込みはしつけでおさえる 袖ふりは折ってしつけをかける 袖丸みづくり 丸みのぐし縫いは白毛2本取りで1本 袖口は三つ折りにしてしつけでおさえる
⑦		脇縫い 前後身頃の脇を縫う 二度縫い	縫い込みはしつけでおさえる
⑧			裾は三つ折りにしてしつけでおさえる つま先しまつ

表4 手 工 程

耳 ぐ け	三 つ 折 り ぐ け	本 ぐ け	そ の 他
③ いしき当て 肩当て	② えり下	⑤ えり	① いしき当て 肩当て
④ おくみ縫い代	⑥ 袖 口		⑤ えり先
⑥ 袖縫い代	⑧ 裾		⑥ 袖丸み
⑦ 脇縫い代			⑧ つま先

6. 結 語

筆者が持つゼミの授業時間の中で、和服体験学習のひとつとして着装指導も取り入れている。この和服を身につける学習は着つけ熟練の目的だけに限らず、和服の取り扱い方や手入れ法といった人間が生活するために不可欠な、衣生活の教育に対する効果もみられる。着装体験することで和服がより身近になった学生は、自らの手で「浴衣を製作したい」と、毎年受講生の半数以上にあたる15人前後の学生が希望し、夏期休業も返上して製作に打ち込んでいる。

本短大は1992年に、服飾美術科から生活文化学科へと学科変更が行われ、その後入学してくる学生の質やカラーも年々様変わりしてきた。そんな中で行われる実習指導は、学生らの製作意欲は大いにあるものの、技術力が伴わない現実と直面し、これまで通りの製作実習方法を行なうことの難しさを実感し、限られた時間内で行なうことに限界を感じた。

そこで今回報告した浴衣製作工程の手順を元に指導し、ミシン工程を組み込むことで、今までの問題点であった実習時間の効率化が実現でき、学生の実習作業の統一も計れたものと思われる。

本来の和服構成指導からみた場合、基礎縫いにあたる運針作業を繰り返し行なう指導が、先ずなされるべきかもしれないが、時代の変化に対応した和服教育を考えたとき、基礎縫いを繰り返し行なう学習は、限られた時間内で学生らの望む作品を仕上げるまでには至らないばかりか、学生らの製作意欲さえ失いかねないと思える。作品の完成時に学生ひとりひとりが、ものをつくる喜びや達成感が得られることを目標とした実習教育の一方策と考えた。

既製品の浴衣の一部に見られる、袖口・えり下・すその部位をミシン縫いで仕上げているといった縫製方法について、和服のもつ本来の美しさを理解させた上で、着物を製作する際に留意する点として、布を丁寧に扱うことの大切さや手縫いによって得られる縫い目のもつ柔らかさといった意味を分からせ、和服の仕上げの美しさを左右する縫いについては、ミシン縫いを併用した着物であっても、外観に影響される部位については、手縫いに優るものがないことを理解させることができた。

これまで実習指導で一番の問題点として、授業時間の不足と学生の技術力低下があげられるが、今回の試みを今後の学習指導に活用し、より良い指導ができることを目標にしたいと思う。

引用・参考文献

- 1) 和裁初級編 財団法人 日本ファッション教育振興協会 1997年
- 2) 縫う 指導と実際 佐川澄子 1978年
- 3) 和服 平面構成の基礎と実際 衣生活研究会 1987年
- 4) 新和服工作 上巻 東京家政学院和服裁縫研究会 1983年
- 5) 和裁の研究 成田順・石原アイ 1982年
- 6) 新しい和裁 大塚末子 1977年
- 7) 新しい和裁 織田稔子 1977年
- 8) 和裁の研究 東京私立短期大学協会編 1981年
- 9) 大妻女子大学：紀要 家政系 1994年
- 10) 大妻女子大学：紀要 家政系 1995年
- 11) 杉野女子大学・杉野女子大学短期大学部：紀要 1994年
- 12) 神戸学院女子短期大学：紀要 1987年

平成9年度

実 習 経 験 調 査

生活文化学科 年 S97 氏名 _____

1. 出 身 校

_____ 県 立 _____ 中学校
 _____ 県 立 _____ 高等学校

2. 教職課程の選択は 1. 有 2. 無

3. 中学校・高校で縫ったものに○をつけて下さい。

和 裁	中 学	高 校
肌じゅばん		
女物ゆかた		
男物ゆかた		
女物ひとえ長着		
長じゅばん		
女物羽織		
その他 ()		
()		

洋 裁	中 学	高 校
パジャマ		
ブラウス		
スカート		
ジャンパースカート		
ワンピース		
スラックス類		
エプロン類		
その他 ()		

4. 運針に関して該当する欄に○をつけて下さい。

	かなり練習した	少し練習した	ほんの少し練習した	全然しない
中 学				
高 校				

5. 和裁に関して自分に該当する番号を○で囲んで下さい。

1. ゆかた位は自分で縫えるようになりたい。
2. 基礎技術を身につけたい。
3. 着付けを学びたい。(ゆかたを自分で着れるようになりたい)
4. 和服についての常識を学びたい。
5. 和服に興味がある。
6. 将来専門的な仕事につきたい。
7. 家の人にすすめられた。
8. その他

6. 和服の着用経験がありますか。

1. 有 (回数) 2. 無 1. と答えた方・それはどんな時ですか
1. 夏祭り・花火大会 2. 正月 3. 成人式 4. 結婚式 5. 文化祭 6. その他